

大久保間歩

大久保間歩は石見銀山最大の坑道で、来訪者に定期的に開放されている 2 つの主な坑道のうちの 1 つです。大久保間歩は、同銀山で最も徹底的に掘削が行われた部分の 1 つで、1500 年代後半から明治時代（1868～1912）まで採掘が続けられ、数世紀にわたり繰り返し拡張されていきました。高い入り口が特徴的なこの坑道は、徳川幕府より石見銀山の監督を任じられた初代奉行・大久保長安（1545～1613）の名を冠しています。

メインの坑道は場所によっては高さ 5 メートルにも及び、そこからより小さな坑道が複数分岐しています。これらは銀鉱脈に沿って掘られており、今でもその痕跡が壁の至る所に確認できます。また、立坑もあり、一部は換気用、その他は地下水を外に排出するために使用されました。メインの坑道の壁は滑らかで、これはのみと金槌によって形作られたものです。坑道はトロッキが入るように明治時代に広げられたため、壁のその他の部分には、通路を広げるために使用されたダイナマイトを含め、荒々しい掘削技術の痕跡が残されています。この時代のトロッキのレールの枕木は、今も地面上に確認できます。

大久保間歩のガイド付きツアーは、4 月から 11 月までの週末と祝日に実施されます。冬季は、坑道がコウモリの冬眠場所となり、坑道内では年間を通してコウモリが飛び回る姿を確認することができます。